

中学校国語科において「学びの実感」を生み出すために

学習評価は有効か

M17EP001

浅川 学

1. 問題と目的

(1) 研究の目的

本研究の目的は、中学校国語科の授業において「学びの実感」を育むために、学習評価は有効かを検討することにある。

(2) 目的設定の背景

筆者は、中学校の現場で「国語は授業では分かるけど、テストだと点が取れない。」や「授業で勉強した文章の問題は解けるが、他の文章だと全く解けなくなる。」という生徒の声を何度も聞いてきた。これらの声に現れる授業で学んだことが他では生かせない生徒の現状が、国語への苦手意識を生み出し、国語嫌いを生んでいると感じてきた。そして、この現状をなんとかしたいと手立てを模索してきた。

なぜ生徒は、授業で学んだことが授業の中だけにとどまり、他の場面で生かせないのであろうか。その原因の1つに、国語は生徒に学習したことの意義や価値を実感させるのが難しい教科であることが考えられる。

国語科における生徒の学習目標把握の難しさは、滝田(2010)などの研究者によって指摘されている。いわば、国語は「何を学ぶか」が生徒に分かりづらい教科なのである。授業で「何を学ぶか」が自覚できなければ、授業を通して「何が身についたか」もはっきりしない。授業を通して「これが身についた」「成長できた」という自覚が得られなければ、授業で学んだことの意義や価値を実感することは難しくなるだろう。そして、学んだことの意義や価値を実感できなければ、授業で学んだことを、どうやって活用したり応用したりしていくかも分からないであろうし、授業以外の場面で使おうとも考えられないだろう。

さて、平成29年版学習指導要領では、総

則に「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」とあり、学習したことの意義や価値を実感させるため、学習評価の有効性に言及している。

以上を踏まえて、筆者は、中学校国語科で生徒が学習したことの意義や価値を実感できる授業作りを目指し、その手立てとして学習評価の活用について着目した。

なお、本稿では田村(2018)を参考に、学習したことの意義や価値の実感を「情緒面」「知識・技能面」「キョウドウ(共同・協同・協働)面」という3つの側面から考え、「学びの実感」という言葉を用いて述べていくこととする。

「学びの実感」

- | | |
|------------------------|--|
| 1 情緒面 | …「わかった」「これが身につけられた」という達成感や授業を通して「成長できた」という自己有能感。 |
| 2 知識・技能面 | …実際に授業で学んだことが身につき、「実際に使えた」や「活用できた」という思い。 |
| 3 キョウドウ面
(共同・協同・協働) | …「一緒に学べてよかった」「みんながいたから」という他者や学び合いに対する思い。 |

2. 方法

研究方法は以下の2点である。

- (1) 先行研究の分析をもとに、「学びの実感」を生み出すための学習評価の在り方について検討する。
- (2) (1)で検討したことをもとに、実習を行っている学校(山梨県内公立N中学校)において、授業を行い、生徒の作品やワークシートの分析から、その成果や課題を検討する。

3. 「学びの実感」を生み出す学習評価

平成 29 年版学習指導要領では、育成すべき資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現が提唱された。学習目標や学習方法の変化は、その成果をどのように見とるかという学習評価の在り方にも変化を要請している。

平成 20 年版学習指導要領の学習評価の在り方の基本を示した「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」では、「学習評価を行うに当たっては、子どもたち一人一人に学習指導要領の内容が確実に定着するよう、学習指導の改善につなげていくことが重要である。」（下線は筆者による。以後同。）と述べられている。

一方、平成 29 年版学習指導要領における学習評価の在り方を議論してきた、文部科学省のワーキンググループが、2018 年 11 月にまとめた「児童生徒の学習評価の在り方について（これまでの議論の整理について（案）」では、学習評価の改善の方向性として以下の 3 つを示している。

- | |
|---|
| ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと。 |
| ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと。 |
| ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは大胆に見直していくこと。 |

ここでは、「児童生徒の学習改善につながるもの」が、「教師の指導改善につながるもの」より上位に位置づけられている。ここから、これからは教師の指導改善につながるだけでなく、何よりも児童生徒の学習改善につながる学習評価が求められることが見て取れる。

二宮（2015）は、イギリスの教育学者ブラックとウィリアムスらによってなされた、子ども自身による学習改善の支援を目指す形成的評価である「学習のための評価」を紹介するとともに、「学習のための評価」の実現には、子どもたちの評価活動への参加のあり方が問

われていると述べる。そして、より良い参加のあり方として、次の 2 点が必要だと述べている。1 点目は学習者にとって利用しやすいフィードバックであり、2 点目は評価活動を通してのメタ認知能力の育成である。特に後者では、学習の場として「評価活動」を位置づけ、子どもたちを主体的に参加させていくことが大切であると述べている。

以上のことから、「学びの実感」を生み出す学習評価として、生徒の学習改善につなげられるような「学習のための評価」を目指していこうと考えた。また、授業実践においては、その実現に向け、利用しやすいフィードバックと、評価活動を通してのメタ認知能力の育成が行えるような具体的な評価活動を考えていくこととした。

4. 単元の概要

（1）授業実践の概要

- ①対象 山梨県内公立 N 中学校
- ②実習期間 5 月～12 月（週 1 回）
- ③授業実践

- 1) 対象 第 1 学年 2 学級 (62 名)
- 2) 実践期間 2018 年 11 月 2 日～11 月 20 日

（2）実践単元について

- ①単元名 合唱発表会に向けて
—小学生にクラス合唱の魅力を伝えよう—
(光村図書 1 年 印象深く思いを伝えよう)

②単元の目標

- ・伝えたい自分の気持ちや考えを、相手や目的を考
ながら書いている。 【関心・意欲・態度】
- 伝えたい相手や目的を考えながら材料を集め、自
分の考えをまとめることができる。 【B 書くこと一ア】
- ◎伝えたい自分の気持ちや考えを、相手や目的を考
えながら整理して分かりやすい文章で書くことが
できる。 【B 書くこと一エ】
- ・表現技法やその効果について理解し、効果的に使
用することができる。 【伝国一イ（オ）】

③言語活動について

実習校では毎年11月に合唱発表会を開き、日ごろの合唱活動の成果を披露している。今年度は、小中連携の一環として、来年度、実習校に入学する市内N小学校6年生の児童を招待した。

そこで、6年生にもっと合唱発表会を楽しんでもらうために、クラス合唱を紹介する文章を書くという言語活動を設定した。

相手意識や目的意識がはっきりしているので、課題を我が事として捉え、主体的に取り組めるのではないかと考えた。

書く文章の形態に関しては、1時間目の授業で、書く相手について考える中で、生徒から「来たいと思っている6年生ばかりではない。」「なんとなく来る人もいる。」「長い文章だと、読んでもらえない可能性もある。見ためで読みたいと思えるリーフレットがよい。」などの意見が出され、リーフレットを作成することに決定した。

5. 研究内容をふまえた学習評価の工夫

「学習のための評価」実現のため、フィードバックとメタ認知能力の育成を目指した評価活動を具体的に考えた。

(1) フィードバックの工夫

生徒に利用しやすいフィードバックの工夫として、次の2点の評価活動を考えた。

【フィードバックの工夫】

- ① 3年生にリーフレットの下書きを評価してもらう。
- ② 作成した作成したリーフレットを小学6年生に渡して、感想をもらう。

まず、中学3年生にリーフレットの下書きを評価してもらうことである。1年生が作成したリーフレットの他者評価を3年生が行う。同じ学年の生徒だと、人間関係が他者評価に影響を与えたり、同じ授業で学んでいるので、同じような視点からしか評価できなくなってしまったりする懸念がある。したがって、学びの先輩である3年生から、フィードバック

を受けることで、1年生に新たな視点が開かれることを期待した。

次に、作成したリーフレットを6年生に渡して、感想をもらうことである。リーフレットを受け取った相手から直接感想をもらうことは、自身の学習の成果を味わう何よりのフィードバックになるに違いない。特に今回は、感想を読む前に「感想に書いてあったらうれしい言葉」を考えて書かせた後、感想を読ませるようにする。自分が想定した言葉が実際感想に入っているかどうかを確認することで、自身の学習到達目標とフィードバックとのずれがわかり、そこから学習改善への糸口が見つけられることを期待した。

(2) メタ認知能力育成の工夫

評価活動を通してのメタ認知能力育成の工夫として、次の2点の評価活動を考えた。

【メタ認知能力育成の工夫】

- ① 評価の達成基準を生徒と授業者が共同作成する。
- ② 達成基準を一覧表としてまとめ、それを利用しながら自己評価や他者評価をおこなう。

まず、評価の達成基準を生徒と授業者が共同作成することである。単元の目標の評価規準を達成するためには、作成したリーフレットにどんな具体的な姿が見られれば良いかという達成基準を、授業者と生徒が共同作成する活動を仕組んだ。この活動には、3つの効果を期待した。1つ目の効果は、授業者と生徒で、ゴールの姿を共通理解することで、生徒に学習の見通しを持たせやすくすることである。2つ目の効果は、生徒が達成基準の作成にかかわることで、課題に対して主体的に取り組むことである。授業者から与えられたものでなく、生徒自身の言葉から授業が作り出されることで、主体的に学ぶ態度が高められると考えている。3つ目の効果は、達成基準の文言の理解を促すことである。筆者は以前、教員が作成したルーブリックを使用し、生徒が自己評価と相互評価を行う実践を試み

た。(浅川, 2017) その実践は, 教員が作成したルーブリックの達成基準が生徒にとっては難しいもので, 使いづらかったことが課題として残った。生徒と授業者と一緒に達成基準作りに関われば, 作成過程の中で達成基準の理解も進むのではないかと考えた。

次に, 達成基準を一覧表としてまとめ, それを利用しながら自己評価や他者評価をおこなうことである。達成基準の一覧表を作成し, 自己評価することで, 何が身についているか, まだ身につけていないかが明らかになる。また, 自己評価を繰り返し, チェックできた項目が増えていけば自身の成長を実感する機会になると考えた。そして, 他者評価においても, 共通の達成基準があることで, 相手の作品を評価するポイントが理解され, 評価しやすくなると思った。

(3) 単元計画

以上の評価の工夫を組み込み, 全6時間の単元計画を立案した。(表1)

表1 単元の学習計画

次	時	主な学習活動
1	1	相手や目的を理解し, どんな形態の文章を書くか考える。
2	2	リーフレットに何を(内容)どんなふう(書き方)書くか考える。
	3	もっと効果的に書くにはどうするか考える。
	書く工夫一覧表を教員が作成 【メタ認知能力育成の工夫①】	
	4	書く工夫一覧表を配付。 リーフレットの下書きをする。 自己評価1回目(チェックシート使用) 【メタ認知能力育成の工夫②】
3年生による下書きの他者評価。 (3年の国語の時間で実施・チェックシート使用) 【メタ認知能力育成の工夫②】 【フィードバックの工夫①】		
3	5	3年生の評価を見ながら, リーフレットを改めて完成させる。 自己評価2回目(チェックシート使用) 【メタ認知能力育成の工夫②】
小学校6年生にリーフレットを渡す。 合唱発表会后, 小学校6年生に感想を書いてもらう。		
4	6	小学校6年生からの感想を見て, 学習を振り返る。【フィードバックの工夫②】

6. 単元の実践

これから, 学習評価の工夫に取り組んだ授業の実践について述べていく。

(1) 評価の達成基準を生徒と授業者が共同作成する工夫

2時間目の授業で, リーフレットに何を(内容), どんなふう(書き方)書くか, クラス合唱を伝える工夫を考えた。ワークシートには, 様々な意見が出されたが, 相手や目的を考えながら話し合い, いくつか絞られていった。内容では, 後に「書く工夫一覧表」につながる「各パートの役割」「お気に入りの歌詞」などが, 書き方では「箇条書きを使う」「相手の印象に残る書き方をする」などが出された。そして, 最後に全員で共通して必ず書くものとして, 内容では「歌の一番聞いて欲しいところ(聞きどころ)」, 書き方では, 「小見出しをつける」ということが決まった。

3時間目は, まず, 前時に必ず書くものとして決まった「歌の一番聞いて欲しいところ」を, 前時に書いた書き方を意識しながら書かせた。そして, 友達が書いたものを見る時間をとった。「歌の一番聞いて欲しいところ」「小見出しのつけ方」「相手の印象に残るように説明する」の3点で, 誰のどんなところが良かったかを考えながら見るよう指導した。その後, 全体で話し合い, 意見を授業者が黒板に整理した。2時間目と3時間目に出た意見を, 授業者が「書く工夫一覧表」としてまとめた。

(資料1)

資料1 「書く工夫一覧表」

6年生に向けて 書く工夫 一覧表

書き方	内容
12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100	<p>1. 聞きどころを明確にする。</p> <p>2. 聞きどころを明確にする。</p> <p>3. 聞きどころを明確にする。</p> <p>4. 聞きどころを明確にする。</p> <p>5. 聞きどころを明確にする。</p> <p>6. 聞きどころを明確にする。</p> <p>7. 聞きどころを明確にする。</p> <p>8. 聞きどころを明確にする。</p> <p>9. 聞きどころを明確にする。</p> <p>10. 聞きどころを明確にする。</p> <p>11. 聞きどころを明確にする。</p> <p>12. 聞きどころを明確にする。</p> <p>13. 聞きどころを明確にする。</p> <p>14. 聞きどころを明確にする。</p> <p>15. 聞きどころを明確にする。</p> <p>16. 聞きどころを明確にする。</p> <p>17. 聞きどころを明確にする。</p> <p>18. 聞きどころを明確にする。</p> <p>19. 聞きどころを明確にする。</p> <p>20. 聞きどころを明確にする。</p> <p>21. 聞きどころを明確にする。</p> <p>22. 聞きどころを明確にする。</p> <p>23. 聞きどころを明確にする。</p> <p>24. 聞きどころを明確にする。</p> <p>25. 聞きどころを明確にする。</p> <p>26. 聞きどころを明確にする。</p> <p>27. 聞きどころを明確にする。</p> <p>28. 聞きどころを明確にする。</p> <p>29. 聞きどころを明確にする。</p> <p>30. 聞きどころを明確にする。</p> <p>31. 聞きどころを明確にする。</p> <p>32. 聞きどころを明確にする。</p> <p>33. 聞きどころを明確にする。</p> <p>34. 聞きどころを明確にする。</p> <p>35. 聞きどころを明確にする。</p> <p>36. 聞きどころを明確にする。</p> <p>37. 聞きどころを明確にする。</p> <p>38. 聞きどころを明確にする。</p> <p>39. 聞きどころを明確にする。</p> <p>40. 聞きどころを明確にする。</p> <p>41. 聞きどころを明確にする。</p> <p>42. 聞きどころを明確にする。</p> <p>43. 聞きどころを明確にする。</p> <p>44. 聞きどころを明確にする。</p> <p>45. 聞きどころを明確にする。</p> <p>46. 聞きどころを明確にする。</p> <p>47. 聞きどころを明確にする。</p> <p>48. 聞きどころを明確にする。</p> <p>49. 聞きどころを明確にする。</p> <p>50. 聞きどころを明確にする。</p> <p>51. 聞きどころを明確にする。</p> <p>52. 聞きどころを明確にする。</p> <p>53. 聞きどころを明確にする。</p> <p>54. 聞きどころを明確にする。</p> <p>55. 聞きどころを明確にする。</p> <p>56. 聞きどころを明確にする。</p> <p>57. 聞きどころを明確にする。</p> <p>58. 聞きどころを明確にする。</p> <p>59. 聞きどころを明確にする。</p> <p>60. 聞きどころを明確にする。</p> <p>61. 聞きどころを明確にする。</p> <p>62. 聞きどころを明確にする。</p> <p>63. 聞きどころを明確にする。</p> <p>64. 聞きどころを明確にする。</p> <p>65. 聞きどころを明確にする。</p> <p>66. 聞きどころを明確にする。</p> <p>67. 聞きどころを明確にする。</p> <p>68. 聞きどころを明確にする。</p> <p>69. 聞きどころを明確にする。</p> <p>70. 聞きどころを明確にする。</p> <p>71. 聞きどころを明確にする。</p> <p>72. 聞きどころを明確にする。</p> <p>73. 聞きどころを明確にする。</p> <p>74. 聞きどころを明確にする。</p> <p>75. 聞きどころを明確にする。</p> <p>76. 聞きどころを明確にする。</p> <p>77. 聞きどころを明確にする。</p> <p>78. 聞きどころを明確にする。</p> <p>79. 聞きどころを明確にする。</p> <p>80. 聞きどころを明確にする。</p> <p>81. 聞きどころを明確にする。</p> <p>82. 聞きどころを明確にする。</p> <p>83. 聞きどころを明確にする。</p> <p>84. 聞きどころを明確にする。</p> <p>85. 聞きどころを明確にする。</p> <p>86. 聞きどころを明確にする。</p> <p>87. 聞きどころを明確にする。</p> <p>88. 聞きどころを明確にする。</p> <p>89. 聞きどころを明確にする。</p> <p>90. 聞きどころを明確にする。</p> <p>91. 聞きどころを明確にする。</p> <p>92. 聞きどころを明確にする。</p> <p>93. 聞きどころを明確にする。</p> <p>94. 聞きどころを明確にする。</p> <p>95. 聞きどころを明確にする。</p> <p>96. 聞きどころを明確にする。</p> <p>97. 聞きどころを明確にする。</p> <p>98. 聞きどころを明確にする。</p> <p>99. 聞きどころを明確にする。</p> <p>100. 聞きどころを明確にする。</p>

小学校6年生に「書く工夫一覧表」を渡す。

小学校6年生に「書く工夫一覧表」を渡す。

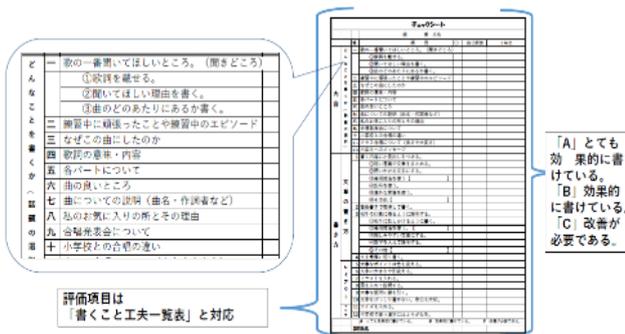
まとめるにあたって、生徒からは単元目標に関わる表現技法に関する意見が出なかったので、授業者が一覧表に入れることとした。

4時間目に「書く工夫一覧表」を配布し、表現技法について説明した。前時に生徒が書いた「歌の一番聞いて欲しいところ（聞きどころ）」を、授業者が様々な表現技法を入れ、書き換え提示した。具体的には「歌の一番聞いてほしいところ」という小見出しを、「注目！天使のメロディに」という隠喩と倒置法を使用ものに変えたり、その説明の文章にも表現技法を使用して書き換えたりした。そして、生徒に表現技法の効果を実際に味わわせながら、積極的に表現技法を使っていこうと指導した

(2) 達成基準を一覧表としてまとめ、それを利用して自己評価や他者評価を行う工夫

4時間目にリーフレットの下書きを行った。「書く工夫一覧表」を見ながら、「もっと効果的に伝わる工夫」を積極的に使うよう指導した。下書きを仕上げた生徒には、チェックシート(資料2)を渡し、自己評価させた。

資料2 チェックシート



チェックシートの評価項目は「書く工夫一覧表」と一致させ、自分がリーフレットに取り入れた項目に対して「A」「B」「C」で自己評価する形とした。この「チェックシート」を、3年生からの他者評価や2回目の自己評価にも使用した。

(3) 3年生に下書きを評価してもらおう工夫
3年生の国語の時間に行った。まず、「書く

工夫一覧表」を配布し、1年生の授業の内容と評価の観点を3年生が理解した。その後、リーフレットの下書きと、その生徒が書いた「チェックシート」を渡した。3年生には色の違う付箋を3種類渡した。黄色の付箋には、効果的に書けている部分へのコメント、青色には、こうすればもっと良くなるというアドバイス、赤色には、「書く工夫一覧表」にはないが、効果的だと思ったところを書くように伝えた。そして、その付箋を下書きの該当する部分に張り付けるように指示した。(図1) また、下書きチェック表にも、A、B、Cで評価させた。

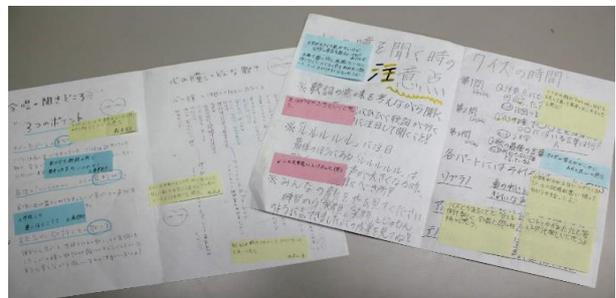


図1 3年生がチェックした下書き

下書きには、様々な色の付箋が張られ、3年生がいろいろな観点から下書きを評価している様子が伺えた。

5時間目に、3年生が評価した下書きとチェックシートを1年生に返却した。生徒は付箋のコメントと、チェックシートの3年生からの評価を見比べながら、3年生の評価を確認していた。次に、そこから感じたことをまとめた。授業後、ワークシートを集め、記述を整理、分類してみると生徒の意見は、3つの項目に分類できた(資料3)。

資料3 3年生の評価を受けて

3年生の評価を受けて(5時間目の授業プリントから)

先輩が見てくれることの喜び

- ・3年生はいろいろな知識を持っているので、色々な視点や私が見つからないことをアドバイスしてくれてうれしかった。

自分の作品に新たな見方ができる

- ・自分が「B」と書いていた所に「Aだよ！」などうれしい言葉をかけてもらい不安なところが自信を持てた。
- ・少し厳しかったけど、違う視点で見ると、また違う課題が見つかるのだなと思った。

自分の学びを再認識する機会なる

- ・自分は相手のことをよく考えられていたと思いこんでしまっていたけど、3年生からの評価を受けて、もう一度考え直す必要があると感じた。

ここから、3年生による他者評価を受けることによって、リーフレットに対して新たな見方が生じていることが見て取れ、3年生によって学習改善につながる効果的なフィードバックが行われたと考えている。

その後、下書きを書き改め、リーフレットを完成させた。(図2)

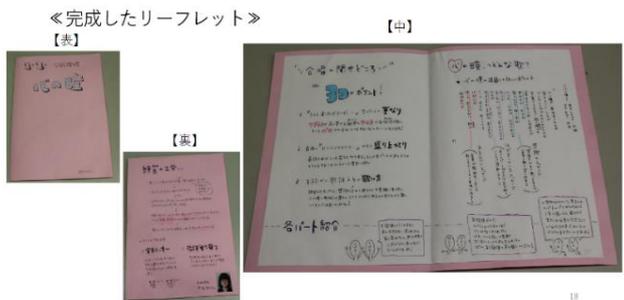


図2 完成したリーフレット

そして、合唱発表会の前日に小学校に届け、事前にリーフレットを読んで合唱発表会に参加してもらうようにした。

(4) 作成したリーフレットを小学生に渡して、感想をもらう。

合唱発表会を見終わった6年生に合唱発表会の感想を書いてもらった。学習への効果的なフィードバックを得られるようにするために、感想を書く項目を授業者が考え、感想用紙を用意した。小学生に書いてもらった項目は、「リーフレットの感想」「クラス合唱を聞いた感想」「〇〇さんへ」(リーフレット作成者へのメッセージ)である。

作成した生徒に、リーフレットをもらった6年生の感想が届けられるようにした。

6時間目は、まず、ワークシートに「感想にあったらうれしい言葉」を書き出した。そして、その後6年生からの感想を配布した。生徒は食い入るように見ながら、その感想に自分が考えた言葉があることを発見すると「あった。」「やったー。」など歓喜の声が上がっていた。

その後、ワークシートに「感想を読んで感じたこと・考えたこと」をまとめた。主な記述を以下にまとめる。

- ・分かりやすく伝わっていたことを知ってうれしかったです。やりがいを感じました。
- ・合唱の「聞きどころ」を分かりやすく書いたら、6年生がそこに注目して聞いてくれたので、効果的に伝えられたと分かった。
- ・どこに注目して書けばよいか分からなかったので「(リーフレットがあって)よかった。」と書いてあってとてもうれしかった。
- ・「歌詞が書いてあって分かりやすかった」と書いてくれて、歌詞に込められている意味を理解しているようでうれしかったし、書いてよかったと思った。

ここからは、フィードバックを受けることで、学んだことの達成感や自己有能感が高まったことが見て取れた。

6. 結果

(1) チェックシートの平均数の移り変わり
 単元の中で同じ項目のチェックシートを使用して、自己評価2回と3年生による他者評価1回を行った。一人一人のチェックシートに記入されている項目の総数と、その記入されている項目のA、B、Cそれぞれの数の平均を出した。(表2)

表2 チェックシートの平均数の移り変わり

	自己評価1回目 (下書き)	3年生による評価	自己評価2回目 (完成時)
全チェック数 (平均)	15.34 個 UP	15.64 個 UP	17.74 個
Aの数 (平均)	8.97 個 UP	9.23 個 UP	11.93 個
Bの数 (平均)	5.94 個	5.16 個	5.61 個
Cの数 (平均)	0.44 個 UP	1.25 個 down	0.19 個

これを見ると、全チェック数とAの数が次第に上がってきている。一方、Cの数は、3年生による他者評価では増え、完成した後の自己評価では1回目より減っている。

これは、3年生による評価によって、下書きから完成作品までに学習調整が行われたためであり、3年生による他者評価の有効性を示すものだと考えられる。

下書きを3年生が評価する際に、3年生は、1年生が気づけていない良いところも見つけ、反対に気づけていない課題も指摘した。また、

3年生は、なぜそのような評価になったかの判断の根拠を付箋に具体的なコメントで残した。1年生は、それを頼りにしながら、課題がある部分を修正し、改善させたのであろう。

（2）3年生の評価による学習改善の実際

3年生の他者評価において学習改善が見られた実際の例を紹介する。

まず、相手意識が高まりわかりやすい文章になった生徒Aの場合である。

【下書き時】

ミッキーマウスのように歌うことを心がけています。

【3年生の付箋へのコメント】

ミッキーマウスのように、どんな感じで歌うのかも少し書いた方がわかりやすいと思った。

【完成時】

歌の出だしから、ミッキーマウスのように高い声を頭の上から出す感じで歌うことを心がけています。

生徒Aは直喩を使用し書こうとした。しかし、その直喩は相手意識が足りないもので、どんな様子がミッキーマウスに例えられているかがわかりにくかった。3年生はそれを指摘し、改善方法を提案した。そこから生徒Aは相手にとってわかりやすい書き方へと繋げていった。

次は表現技法の誤った理解が改善された生徒Bの例である。

【下書き時】

今まで全員で練習してきた。共にしかられ、共に努力してきた。だから聞いてほしい、このサビを。
→使った表現技法【体言止め】×

【3年生の付箋へのコメント】

体言止めじゃないよね！？
体言止めは、文を名詞で終わらせる技法だよ。

【完成時】

みんなに届けたい、このサビを。
今まで一生懸命練習してきたから。たくさん叱られたけど、乗り越えてきたから、共に練習した仲間と。
→使った表現技法【倒置法】○

生徒Bの下書き時の表現技法における理解の曖昧さは、3年生の指摘で改善された。

（3）振り返りワークシートの記述

6時間目に「この学習を振り返って、学んだこと、考えたこと」を記述させた。その記述を整理すると、「学びの実感」の3側面に分類できる記述が数多く見られるとともに、学習評価を工夫することは、次の学びにつながる可能性があることを示唆する記述もあった。主な記述を表にまとめる。（表3）

表3 振り返りワークシートの記述

生徒の主な記述	
情緒面	<ul style="list-style-type: none"> 今の6年生がどんなことを知りたいか、今回それをよく考えました。<u>すごく良い経験になりました。</u> <u>この学習をしてよかったです</u>と思いました。
知識・技能面	<ul style="list-style-type: none"> 小見出しに問いかける言葉を入れたらもっと<u>わかりやすく</u>かけたと思います。 <u>少し変わった言葉</u>を小見出しに入れると面白く読みやすくなると分かりました。 文字の書き方や、<u>簡条書きの利点</u>やうまい使い方などを有効に使えるようになりました。
キョウドウウ面	<ul style="list-style-type: none"> 3年生に見てもらって先輩の意見を取り入れることによって、より分かりやすくなっていくのを見て、<u>やっぱり3年生ってすごい</u>なって改めて感じました。
次の学びにつなげる	<ul style="list-style-type: none"> この学習で学んだ表現技法は、<u>別な機会でも生かして</u>行きたい。 <u>これからも、こういう相手だったらどう思うのだろう</u>などと考えながら文章を書いて行きたい。

7. 成果と課題

本稿では、中学校国語科において、「学びの実感」を生み出すために学習評価は有効かを検証するため、「学習のための評価」実現に向けて単元内に様々な評価活動の工夫を入れながら、そのあり方について検討してきた。

その結果、「学びの実感」を育むために学習評価は有効であるとの結論を得られた。それは、学習の振り返りである（表3）において、「学びの実感」の全ての側面に当てはまる記述が見られたことに裏付けられている。また、

(表3)からは、「学びの実感」の高まりは、次の学びへのつながりを高めることも示唆されている。今後の授業で、既習事項として、この単元の学習を振り返らせれば、さらに定着を促したり、今度も使ってみよう、活用してみようという思いも高められたりするのではないか。授業において過去の学びと現在の学びの関連を理解し、いろいろな場面で学んだことが使えると分かれば、生徒が日常生活など他の場面でも、学んだことを活用しようとするはずである。

本単元で、生徒が最も学習の意義や価値を感じた場面は、6年生からの感想を読んだ時であった。今回は6年生からの感想が、全て授業者や生徒が望む方向のものだったので、学習の意義や価値の実感につながれたが、もし逆のフィードバックを受けた場合はどうだったであろうか。フィードバックの効果が大きいだけに、意図しないフィードバックを受けたときの支援の手立てをどうしたらよいか今後検討していく必要があると考えている。

さて、学習評価を工夫することは、授業者自身の指導改善にもつながったと考えている。今回、授業者をする中で、生徒一人一人の学びを支えたり、調整したりする教員の役割の重要性に気づいた。3年生からの他者評価のコメントの内容が分からず次へ進めない生徒に、「先輩は、こんなことを指摘したと思うよ。」と言葉を補った。すると生徒は本番ではその個所を改善できた。国語が苦手な生徒はどうしても自己評価が低くなる。そんな生徒に「書く工夫一覧表」を見ながら、「ここはできているよ。」と勇気づけた。生徒ははにかんだ笑顔を見せた。そのような授業者の生徒への関わり方は、生徒の学びに向かう姿勢を後押ししてきたと感じている。それは、授業者にとって、今までは教員主導で行ってきた授業づくりから脱却し、生徒主体の授業づくりへ向かう糸口であると考えている。

8. 今後の展望

今回の学習で、生徒が学習改善に向かうきっかけには、ズレの自覚があった。下書きを書いた後に、自己評価と3年生からの評価のズレを発見したことで、さらに良いものにするための道筋がはっきりし、改善へ向かった。他者とのズレを認識することから学びが深まっていくことを実感できたことは、筆者にとって、これから実践を考える上で、大きな手ごたえであった。

これからも、このようなズレ自覚させる実践を積み上げていきたいと考えている。例えば、光村図書中学1年の教科書「大人になれなかった弟たちに……」では、「親せきに冷たくされた時の母親の心には、どんな感情がどのくらいの割合であったか。円グラフに表そう。」という発問で考えさせたい。円グラフで表せば、他者と交流させる際に考えのズレが可視化され、学び合いの中で読みが深まる可能性が高まるのではないかと考える。

また、文学的文章の授業では、初発の感想と授業後に書かせたレポートを合わせて読む時間をとり、振り返りを行うことも考えられる。そうすることで、個人内で学習前後のズレを自覚できるだろう。

他者とのズレ、個人内のズレ、様々なズレを自覚させながら、今後も「学びの実感」を生徒に育めるような授業づくりに努めていきたい。

引用文献

- ・浅川学(2018) ルーブリックを活用した国語科授業—中学生の主体的な学びを育むために—。山梨大学教職大学院平成29年度教育実践研究報告書。pp113-120.
- ・滝田徹(2010) 国語教育における学習目標意識に関する一考察。広島大学大学院研究紀要 第二部 第59号。pp141-150.
- ・田村学(2018)『深い学び』。東洋館出版社。pp208-221.
- ・二宮衆一(2015)「教育評価の機能」。西岡加名恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために』。有斐閣。pp51-76.
- ・文部科学省(2010)「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」
- ・文部科学省(2018)「児童生徒の学習評価の在り方について(これまでの議論の整理について(案))」